『奥の細道』における歌枕の描写とその有無についての考察

ヴォザーバル・マテイ＊

1．　はじめに

『奥の細道』は、松尾芭蕉とその同行者及び弟子の曽良が1689年に行った旅を描いた俳文、及び紀行文である。芭蕉と曽良は３月に江戸を旅立ち、陸奥と北陸を巡り、８月に現在の岐阜県にある大垣に着き、『奥の細道』に描かれた旅を終えたのである。芭蕉はこの旅で、自分の憧れであった昔の歌人、特に西行法師、能因法師と宗祇の跡を辿り、それらの歌人が詠んだ名所・歌枕を訪ねることを目的とした。特に、作品の比較的少ない文字数にしては『奥の細道』に描かれた歌枕の数は非常に多いのである。岩波文庫の『奥の細道』はわずか49ページであるが、記述された歌枕は58箇所にも及ぶ。（上野 1989：170）本文の旅立ちの章も、白河の関や松島など、歌枕がいくつか挙げられ、旅の計画が歌枕に対する憧れにはじまるかのように書かれている。

『奥の細道』は実際の旅に基づいた紀行文で、その旅を忠実に描く部分が沢山あると考えられるが、同時に虚構も見られる。曽良が残した旅日記との比較によって、実際の旅と異なる部分も数多くあることが判明している。その部分は、旅における出来事の順番や、詳細な部分の変化や消失が殆どであるが、完全な虚構であると考えられる部分もある。その例として、二つのエピソードを挙げる。一つは、日光山に登る前晩、芭蕉と曽良が仏吾左衛門という人物の家に泊まり、仏吾左衛門のまるで仏のような素朴で真面目な人柄に驚くエピソードである。もう一つは、芭蕉が市振の宿で同じく旅をしている遊女と語り合い、同情の念を覚えるエピソードである。以上の２つエピソードは、どちらも印象に残る人物との出会いであり、どちらも『撰集抄』という説話集におけるエピソードと非常に似ている。江戸時代には、『撰集抄』が西行法師の作品だと信じられていたのである。そのため、芭蕉が『撰集抄』を模倣し虚構のエピソードを作品に取り入れたことは、『奥の細道』に描く旅を西行法師の旅に近づけるための試みだったのではないかと考えられる。（堀切 1997：288）

上野洋三は『芭蕉、旅へ』（1989）において、以上に述べた虚構だけではなく、芭蕉と曽良の服装をはじめ、孤独な旅立ちや旅における死に対する意識など、芭蕉の憧れであった西行法師の旅を連想させる要素を数多く指摘した。（上野 1989：171）本作品のはじめに曽良が描かれていないことも、孤独な旅立ちを描くための試みであったと考えられる。以上のように、芭蕉は『奥の細道』の旅を、自分の理想、すなわち西行法師が行っていた旅を連想させるように描いたと考察することができる。

つまり完全な虚構である部分と、完全な事実であると考えられる部分とがあるが、実際の旅に基づきながら少しだけ異なるといった部分もある。そのように、『奥の細道』では、実際の旅と昔の歌人の旅という二つの空間が共存して重ね合わせ

＊カレル大学大学院生

られていると思われる。以上のように構成される作品における歌枕は、有名な歌を連想させ本作品を昔の文学作品に繋げる、つまり、その２つの空間を繋げると同時に、芭蕉が自分の目で見てそれを作品に描いた場所であるゆえ、実際の旅の舞台でもあるのである。つまり、以前述べた二つの空間の共通点になっており、『奥の細道』の中心にある。

また、芭蕉が『奥の細道』の旅に訪ねたにもかかわらず、本作品に登場しない歌枕も存在する。本稿ではその記述されなかった歌枕に着目する。記述されなかったことは、作者の意図的な選択なのだろうか。作者が歌枕を目的として旅をし、その歌枕を訪ねたにも拘らず、ただの気まぐれでそれらを作品に取り入れなかったという選択は非常に考えづらい。その選択の背景にある理由に着目し、考察を試みる。

『奥の細道』における歌枕の具体例を挙げ、以前の時代の歌人の作品との関係を中心に、『奥の細道』における歌枕の描写と、その描写の有無を分析する。次に、それを踏まえ、記述されなかった歌枕の例を挙げ、その特徴を明らかにすることを試みる。その結果、記述されなかった理由と作者の意図が明らかになるであろう。

２．本作品における歌枕の描写

２．１．白河の関

以上述べたように、『奥の細道』で取り上げられる歌枕が多数あるが、本稿ではその代表的だと思う２つの歌枕を考察する。

まず、白河の関の例を挙げる。白河の関は平安時代以降重要な関所であり、陸奥を目指す旅人は白河の関を通ることが多かった。そのため、白河の関を通るときの自分の気持ちについて、様々な歌人が歌を詠んだ。その中では、ようやく陸奥という一番都から離れた日本の地域にたどり着いた、という旅心を表した歌が多い。平兼盛による「たよりあらばいかで都へつげやらむ今日白河の関は越えぬと」や能因法師による「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」が有名であるが、その他に多数ある。また、地名に「白」という漢字があるため、雪や卯の花などの白いものとともに詠まれたことが多かった。(片桐 1999：215)

奥の細道において、白河の関がどのように描かれているのであろうか。白河の関の章は比較的短くないものの、場所自体の描写は殆どない。平兼盛、能因法師、源頼政、藤原季通と僧都印性による５つの有名な短歌が作品の中では引用されており、秋風、雪、青葉、紅葉など、そのモチーフが挙げられてはいるが、芭蕉が見た景色についての描写は非常に少ない。その背景に、おそらく白河の関の当代の状態があると考えられる。江戸時代には、白河の関が昔あった場所にはすでに関所がなく、その建物さえ残っていなかったのである。(堀切 1997：112)

しかし、ここで描かれているのは主に場所自体ではなく、主人公の旅心である。「白川の関にかゝりて旅心定りぬ」と書かれ、それは白河の関に辿り着き、ようやくこの旅が始まったような気分になったという気持ちが描かれているのである。能因法師などと異なり、世界の果てのような、故郷から離れた場所に来たため、懐かしく都を思い出すような気持ちではなく、ようやく目指していた陸奥に辿り着いた、という気持ちである。

こうして、奥の細道における白河の関の章は、場所自体の描写が少ないが、昔の歌人の引用だけではなく、それらを踏まえて主人公の旅心を表したものであり、昔の歌人の世界と芭蕉の旅の世界を繋げる機能を持っている。

３．２．黒髪山

次に、黒髪山の例を挙げる。日本には黒髪山という場所は奈良県の黒髪山など数箇所あるが、歌枕として有名なのは、日光の近くにある男体山という山のみである。黒髪山とはその別称である。

日光白根山の次に、日光の山脈の一番高い山であり、平安時代中期から歌に詠まれてきた。

そこで、源頼政による「身の上にかからむことぞ遠からぬ黒髪山に降れる白雪」という歌が非常に有名である。その歌は、黒い山とその山頂に降った白雪を対照させ、白雪を白髪に例える視覚的隠喩を使い、年をとって髪が白くなった気持ちを表している。他の有名な歌にも、白髪を暗示することが多い。(片桐 1999：147)

『奥の細道』における黒髪山の描写は日光の章の一部であり、日光から見た黒髪山の最初の景色が次のように描かれている。「黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。」とのことである。つまり、黒い山の上に白い雪が積もっており、頼政の和歌を思い浮かばせる描写である。その後に書かれる「剃捨て黒髪山に衣更」という発句は曽良に詠まれたと作品で記述され、作者の正体が確実に判明していないが、ここで着目したいのはその点ではなくその内容である。その発句の次に、曽良が紹介されて、発句自体も曽良を紹介する役割を持つ。「黒髪山に衣替え」は曽良の黒い服を表した表現であるが、山の上の雪は白髪ではなく、曽良の髪を剃った頭を隠喩的に表す。そうして黒髪山の発句も頼政の和歌と同じように、黒髪山の姿を人の姿に例える視覚的隠喩を使ったが、その捉え方は新鮮だといえよう。またそれは、曽良の髪を剃った頭と黒い服を着た姿を描き、西行法師の旅姿を連想させる試みでもあろう。

黒髪山の描写も実際の旅を描きながら、昔の歌人の歌や姿を踏まえた要素も多いという点において、黒髪山の描写は白河の関の描写と共通しており、芭蕉の旅と昔の歌人の旅を繋げる役割を持っているといえる。以上白河の関と黒髪山の例で示したように、芭蕉は歌枕の描写で、昔の歌人の模倣ではなく、その昔の歌人の歌を踏まえた新鮮な捉え方、つまり自分の旅と昔の歌人の世界のバランスを目指していたと思う。

3．記述されなかった歌枕

以上、『奥の細道』における歌枕はどのように捉えられるか考察し、場所自体が昔から大きく変わったにも拘らず本作品に登場する場合もあると判明した。そのため、歌枕の姿が名歌に登場する姿とあまりにも異なるという理由で、作者が取り上げないことにしたわけではないと断言できると思う。では、芭蕉が訪ねた歌枕が記述されない理由は何であろう。次に、記述されなかった歌枕の例を3つ挙げ、それを考察する。

3．1．隅田川

奥の細道の旅は江戸から始まり、旅の動機などを説明する序章の次に主人公は船に乗り、隅田川を上り、現在の北千住に当たる千住で船を降り、友人や弟子に送ってもらいながら旅立つ。しかし、こうして船で行ったのは隅田川にも拘らず、隅田川という地名は一度も表記されない。この章に江戸という地名も見られないが、上野などの江戸の名所が表記されるため、単純に江戸の地名を避ける試みではなかったと言えよう。

第一、隅田川は歌枕として非常に著名だったため、芭蕉とその時代の読者はみなそれを知っていたに違いない。隅田川は平安前期から非常に有名な歌枕で、様々な時代の様々な歌人に詠まれたが、元々有名になったきっかけは伊勢物語である。伊勢物語の9段における、在原業平がモデルになったと思われる主人公は隅田川のほとりにたどり着き、川を渡るとき、都やそこに残した人に対する思いを表す、「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」という歌を詠むエピソードはあまりにも有名である。その他にも、同じように長い旅における故郷への望郷などを詠んだ歌が多い。(片桐 1999：228)

『奥の細道』の旅立ちの章では、芭蕉は旅への憧れ、旅立ちたい願望、西行法師などが詠んだ歌枕を自分の目で見たい気持ちや、旅に対する期待

を強く表している。そのために、旅の途中で寂しさを感じたり、故郷に帰りたかったりする気持ちを連想させる歌枕は、旅立ちの章にどれほどふさわしくないか明らかであろう。そこで、芭蕉はそのようなテーマの対立を避けるために、隅田川という地名を意図的に表記しなかったと思われる。

３．２．束稲山

束稲山は平泉の近くの山で、別称はさくら山である。さくら山という別称の由来は、西行法師の『山家集』における短歌にある。「ききもせずたばしね山のさくら花吉野のほかにかかるべしとは」という歌で、西行法師は束稲山が吉野山に匹敵すると詠んだのである。(上野 1989：184) 西行法師が憧れであった芭蕉は『奥の細道』で頻繁に『山家集』を引用していたので、さくら山の歌を知らなかったはずがないといえよう。また、曽良の旅日記にも、「さくら山（中略）ヲ見ル」とある。芭蕉と曽良が『奥の細道』の旅に束稲山を見に行ったことが明らかである。

しかし、『奥の細道』では、平泉の展望が見られる高舘に登り、周りの景色を見ることが細かく描かれているが、さくら山と束稲山という地名は表記されていない。その原因は、主に芭蕉が平泉を訪れた季節にあると思われる。平泉を訪れたのはさみだれの季節、つまり桜がすでに散ってしまった５月である。もし吉野山に匹敵する桜の名所を描いたら、読者に桜を連想させるに違いなく、『奥の細道』に描かれた景色とあまりにも合わないことになってしまう。また、平泉の章の中心は景色の描写ではなく、平泉の過去の振り返りを踏まえ、人間の儚さを表すことであるため、有名な歌枕で読者の目を逸らさせることも望ましくなかったので、意図的に表記しなかったと解釈することも可能である。どちらにしても、以上のようなテーマの対立がおこらないように、束稲山は意図的に記述されなかったと思われる。

３．３．浮島

最後に、浮島の例を挙げる。浮島は松島の南にある海岸にあるいくつかの歌枕の一つであり、浮いている島に見立てて、頼りない不安定な状態を詠んだ歌が多い。源順による「定めなき人の心にくらぶればただ浮島は名のみなりけり」という歌が代表的である。(片桐 1999：67) 曽良の旅日記によると、芭蕉は浮島の辺りを訪れ、末の松山・沖の石・野田の玉川・浮島という４つの歌枕を見に行ったとあるが、『奥の細道』では浮島だけは取り上げられていない。歌枕が多いため、一つを除くことは不可能ではないが、地名さえ表記されないことは作者の意図を示すと思われる。

本章の主題になっている末の松山は、百人一首の一つであり藤原元輔による「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」をはじめ、男女の恋の理想を描く歌が非常に多い。片桐 1999：232)『奥の細道』でも、それを踏まえて理想的な恋について芭蕉は触れている。そのように恋を描く文章の直後に、人の心の浮き浮きした状態を連想させる歌枕を取り上げることはあまりにもふさわしくないと思われる。作者はおそらく、以上の例と同じようにテーマの対立を避けるために、本章の中心にある末の松山より比較的重要ではない浮島を消すことで、そうして本章の雰囲気を保ったと思われる。

４．結論

以上、『奥の細道』の旅の舞台であるにも拘らず、本作品に登場しない歌枕の、記述されなかった理由を判明することを試みた。本稿では、『奥の細道』に登場する歌枕の描写においては、芭蕉の旅の世界も昔の歌人の旅の世界も優先されないこと、そして名歌の歌意を踏まえながら実際の旅と当時の歌枕の景色をかなり忠実に描く場面が多いこと、この２点を示した。また、歌枕の姿が昔より変わっても、それは取り上げない理由にならず

ないことを判明した。

それを踏まえ、記述されなかった歌枕の例を挙げ分析した結果、取り上げられなかった理由はおそらく、本作品のテーマと歌枕が連想させるテーマの対立を避けるという作者の意図的な試みであることを示した。そして、取り上げられた歌枕の描写にも歌枕を意図的に記述しなかった作者の選択にも、昔の歌人の世界と作者の実際の旅の世界のバランスを保つ試みが見られる、という見解を提案する。

しかし、本稿での分析はまだ不十分であり、様々な問題が残っている。殊に、歌枕についてのより広い範囲の資料、特に江戸時代の資料を扱い、考察する必要があると思われる。更に、本稿で挙げた例が少ないため、曽良の旅日記に表記された歌枕と『奥の細道』に登場する歌枕の比較をさらに行う必要がある。そして記述されなかった歌枕をより多く見つけ出し、それらを分析する意義があると思われる。それを今後の課題にしたいと思う。

参考文献

一次文献

松尾芭蕉（著）・萩原恭男（校注）『芭蕉 おくの細道』 岩波文庫、1987.

松尾芭蕉（著）・穎原退蔵・尾形仂（訳注）『新版 おくのほそ道 現代語訳／曽良随行日記付き』 角川ソフィア文庫、2003

松尾芭蕉（著）・富山奏（校注）『芭蕉文集』 新潮古典集成、1978.

二次文献

上野洋三『芭蕉、旅へ』 岩波書店、1989.

上野洋三『芭蕉自筆「奥の細道」の謎』 二見書房、1997.

片桐洋一『歌枕　歌ことば辞典　増訂版』 笠間書院、1999.

楠元六男・深沢眞二『おくのほそ道大全』 笠間書院、2009.

堀切実『おくのほそ道―永遠の文学空間』 日本放送出版協会、1997.